

報告

「多文化共生論」ワークショップ報告 ～岩手県国際交流協会との協働による授業～(第3報)

Workshops with Facilitators from Iwate International Association
in a “Multi-Cultural Society” Class:
A Report (Part3)

吉原秋*

Aki YOSHIHARA

Keywords: *Multi-Cultural Coexistence, Cross-Cultural Communication, Collaboration with the Local Community*
多文化共生, 異文化理解, 地域協働

1.本稿の目的

筆者が担当する「多文化共生論」は、国際文化学科1年後期に開講されており、グローバル化する日本において、近い将来に身近な地域社会で外国出身住民と接することになるという前提で、異文化理解を促進し、地域の国際化に貢献できる人材の育成することをねらいとしている。このねらいに従って、平成21年度から岩手県国際交流協会の協力を得て、連続ワークショップ形式の授業を取り入れている。経緯および過去2年間の実践については、これまでの報告を参照されたい¹⁾。

3年目となる今年度であるが、ワークショップの材料が一部刷新される等、よりブラッシュアップするための試行錯誤は、いまだに続いている。学外講師を招いたこのような取り組みを継続的に記録し、公表していくことは、地域の国際化に一定の役割を果たすべき国際文化学科として、当然必要なことであると考え。

2.ワークショップの概要

授業は火曜5限に行われ、履修者は8名であった。

全15回の授業のうち、開講当初は筆者が講義を行い、その後、1回の講義を挟んだ1回と3回に分けて、計4回のワークショップを行った。その後また講義に移り、学生が課外で直接参加した国際交流・異文化理解に関わる活動について発表会を実施したのは、例年と同様である。

内容・形式・担当者等は、筆者の授業計画からの要望を受けて、講師陣によって決められた。テーマとして、講義部分では「文化とは何か」「異文化接触の際の課題」「日本の多文化共生をめぐる歴史と現状」「外国人集住地域の取り組みと課題」を扱い、ワークショップ部分では「異文化接触の際の課題」「岩手県の現状と課題」を扱っ

た。具体的なワークの内容は、昨年度から一部変更されている。

ファシリテーターを勤めた講師は、過去2年間担当いただいたチームから4名が参加くださった²⁾。講師謝金等の費用は、盛岡短期大学部と県国際交流協会とで、それぞれ2回分ずつを負担した。

この場を借りて、お忙しい中をご協力くださいました岩手県国際交流協会、同協会宮順子氏、同じく中村美香子氏およびワークショップに関わって下さった方々に、心から感謝申し上げます。

3.ワークショップ各回の内容

ワークショップごとに、まず内容を記す。各回のねらい及びワーク名は講師が付けたものである。内容については、講師が準備した資料に基づいて、筆者が要約・補足した。その後、学生が毎回授業の一週間後までに提出したレポートから、学生の感想・反応を筆者がまとめたものを記す。

3-1. 第1回11月8日(火)

3-1-1.内容

講師 藤沢義栄氏(県内公立小学校教諭)

○異文化理解ワークショップ1

ねらい「日韓の歴史背景を知った上で、国際交流・国際理解は国家間の関係を超えてできるものであり、未来につながっていくものだということに気づく。」

アイス・ブレイキング(自己紹介)

ワーク「孫基禎さんの軌跡」

ベルリン五輪男子マラソンで優勝した孫基禎さんの写真を、最初は説明なしで見、次に説明を受けてから

* 国際文化学科

改めて考えてみる。最後に孫氏の息子さんに手紙を書く。

3-1-2.学生の反応

このワークは、今年度に初めて取り上げられた内容である。初回だったので、多少硬さはあったが、みな積極的に取り組んでいた。感想としては、まず、事実の部分に素直に驚いていた。直前の授業で韓国併合について講義を行っていたが、具体的な生身の事例には想像が及んでおらず、かなり衝撃を受けていた。それぞれ真剣に手紙を書いており、その分量には講師の方も驚いていたほどだった。孫氏の生前の言葉には感銘を受け、国際理解のあり方について前向きに考える姿勢が見えた。

3-2.第2回 11月29日(火)

3-2-1.内容

講師 吉田武夫氏(県内公立高校教諭)

○異文化理解ワークショップ2

ねらい「異文化に接触したときにどのような気持ちになるか、どのような行動に出るか、ということをも自分自身におきかえて考える。」

アイス・ブレイキング

「私の好きなラーメン」各自が好みの味付けや具を選んだ結果、同じラーメンができないことを実感する。

ワーク「じゃじゃじゃじゃ」

ハル国とフユ国という、言語・価値観・行動様式が異なる二つの民族に分かれ、異文化交流のシミュレーションを行う。その結果何を感じたか、を発表し合い、さらに、お互いの感想を聞いてどう思ったか、を話し合う。

3-2-2.学生の反応

アイス・ブレイキングで「自分と同じ好みのラーメン」がなかったことに驚き、そこから文化の多様性に思いをめぐらせる者もいた。ワークでは、交流のロールプレイングを繰り返したことが、かなり深く考える契機になっていた。違う属性の参加者が相手だったら違う展開になったのではないかと考え、「異文化理解の難しさ」を実感していた学生が多かった。その一方で、「違いを理解して受け容れる」ことの重要さも強調されていた。事前に相手の文化や歴史を知っていれば、もっと理解が容易になるのではないかと、という感想も複数あった。

3-3.第3回 12月6日(火)

3-3-1.内容

講師 熱海アイ子氏(日本語支援・異文化理解ゆうの会

代表)

○地域在住外国人の現状をテーマにしたワークショップ

1～一関の現状～

ねらい「外国人が身近に居住した場合の、心理や行動を考え、よりよい共生を築いていくには自分はどうあるべきかを考える。」

アイス・ブレイキング(自分の身近にいた外国人)

ワーク1「マイノリティーWS」

額にシールを張った後で、声を出さずにグループに分かれる。

ワーク2「外国人が大勢、突然我がご近所に」

アパートの半数を南の国の出身者の工場労働者の家族が占めることになったという設定で、自治会長に届いた苦情(例・「雪かきをしない」「挨拶をしない」)が日本人に当てはまるか外国人に当てはまるかを、グループごとに考え発表する。

3-3-2.学生の反応

二つのワークから、自分たちがいかに先入観をもって物事に臨んでいるか、に気づいていた。これまでのワークでは、事前に知識があった方が理解を深めることができる、と感じていた学生が多かったが、今回は逆に、事前に知識があることが先入観につながり、理解を妨げることがある、という難しさに直面していた。また、一関の事情を初めて知ったり、自分の周囲との付き合い方を考え直す契機としたりする等、非常に身近な問題として捉えていた。

3-4.第4回 12月13日(火)

3-4-1.内容

講師 村井好子氏(いわて多文化子どもの教室むつみっこくらぶ代表)

○地域在住外国人の現状をテーマにしたワークショップ

2～外国につながる子ども(児童生徒)たち～

ねらい「外国につながる子ども(児童生徒)たちについて、イメージすること、疑似体験することを通じて、多文化共生分野でのサポートについて考えるきっかけとする。」

アイス・ブレイキング(これまで接したことのある外国人の子ども)

ワーク1「疑似体験・読めない言語による算数」

グループごとに、中国語、ハングルで書かれた算数の計算問題と文章題を解いた後、感想を発表する。解説を受け、自分たちに可能なサポートを考える。

ワーク2「ディエゴ君の物語」

小学校に転校してきたディエゴ君をめぐる状況をマンガで読み、「受け入れる側として、どの時点でどうすれば

よかったのか？」をグループごとに考え発表する。

3-4-2. 学生の反応

ワーク2は今年度に初めて組み入れられたものである。両ワークとも「学校に通う子ども」がテーマで、学生にとってはかなり感情移入しやすかったようである。未知の言語で学ぶことの困難さを経験するとともに、学校生活での不自由さや困難さについて述べる感想が多かった。自分の過去の実体験にひきつけて個人としての支援を考えたり、さらに広げて学校や地域全体でのサポートの必要性に触れる学生もいた。

4. 成果と課題

最後に、連続ワークショップの成果と課題を挙げ、結論にかえる。

4-1. 成果

実施する側にとっては積み重ねがあるが、受講生である学生にとっては、常に初めての体験となる。今年度は、県国際交流協会の中村氏の依頼もあって、ワークショップ全体をふりかえっての感想を課した。それをもとに、ワークショップが学生に与えた影響を挙げていく。

第一に、頭では分かっていたつもりになっていた抽象的な知識を具体的に経験することによって、深く考える契機となっている。例えば「国際交流の一面しか見ていなかった」「自分の中にある先入観に気づかされた」という感想があった。その上で、自分なりに今後も積極的に関わっていききたいという意欲が見られた。

第二に、グループワークの長所も正しく理解されていた。一人だと思いが固定化しがちだが、グループで話し合うことによって違う意見に接し、より深く考え、その過程や結果を共有できる、と学生自身が実感できていた。

4回のワークショップ終了後に、「最も考えさせられた活動はどれか」と尋ねたところ、ほとんどの学生が第1回を挙げた。事前の講義でいわゆる在日問題の知識は得ていたが、自分たちが知らない事実を知らされ、知識不足を感じた、ということだった。それは否定的な感想ではなく、もっと考えなくてはならない、という前向きなものだった。次に、「最もインパクトのあった活動はどれか」と尋ねたところ、第2回と第3回が挙げられた。前者では、ロールプレイングゆえの印象の強さと、異文化交流の擬似体験とが、理由となっていた。後者では、自分自身の固定観念、先入観と向き合ったことが、強い印象を与えていた。なお、第4回についても、最終的なふりかえりでは、身近な事例を学んだ例として言及されており、実は印象深かったと思われる。

今年度のワークショップは、これまでに比して回数が少なく、コンパクトな内容であったが、学生に対して相

応の効果をもたらしたと結論づけることができよう。

4-2. 課題

今年度は、教科書という新しい検討課題が登場した。今年度の授業途中に、筆者も分担執筆した教科書が完成したのである³。とはいえ、既に授業計画が進行していたので、あまり積極的に使用することができなかった。今後、よりワークショップを活かす方向で、講義の順番等を検討していく予定である。

授業との連携という点で付け加えるなら、ワークショップへの要望が筆者から一方通行している状態は好ましくない。例えば今年度で言えば、ファシリテーター側から、ワークショップ第1回の前に必要な知識を講義しておいてほしいという要望をいただき、それに応えた。さらにより有機的に関連づけることができればよいと考えている。

また、自分なりの昨年度の検討を経て、期末課題として、学生に岩手で「多文化共生」を実践するためのより具体的なアイデアを問うてみた。学生がどのような提案を考えてくるか、結果を待ってさらなる今後の検討の材料としたい。

3年間の実践を踏まえて、来年度も県国際交流協会とともに連続ワークショップを開設していく予定である。PBL (Project Based Learning) の効果が注目されている今日、このような授業実践を継続していくことは大きな意義があると確信している。今後もさらに効果を上げるべく、学外の講師陣と協力して、改善を図っていきたい。

¹ 吉原秋『「多文化共生論」ワークショップ報告～岩手県国際交流協会との協働による授業～』(2010)岩手県立大学短期大学部研究論集12号53～56頁、「同(第2報)」(2011)岩手県立大学短期大学部研究論集13号107～111頁

² 『いわて国際理解ハンドブック 世界はともだち』(岩手県国際交流協会・国際協力機構東北支部発行、2008年)の作成に携わったメンバーで、毎年連携してワークショップに臨んでくださっている。現在第二弾発行の準備中である。

³ 石橋敬太郎・吉原秋・熊本早苗・細越久美子『いわて多文化共生ハンドブック』(2011)杜陵高速印刷出版部